野外炊事を通じた児童のコミュニケーション能力の変動

・指導者の関わりに注目して・

○清水一毅¹・岡林春雄²

(¹山梨大学教育学部附属特別支援学校・²徳島文理大学大学院)

キーワード：コミュニケーション能力、関わり、野外教育

Changes in Communication Ability of Children Through Outdoor Cooking

Focusing on Leader's Relation

Kazuki Shimizu¹, Haruo Okabayashi²

(¹Yamanashi University Affiliated School for Children with Disabilities, ²University of Tokushima Bunri)

Key Words: Communication Ability, Relation, Outdoor Education

目 的

現在、「コミュニケーション能力の低下」が問題視されている。そこで筆者が注目するのは野外教育である。野外教育ではコミュニケーションをとらないと各活動ができないため、児童のコミュニケーション能力が発達していくと考えられる。また、野外教育における指導者は、リーダーシップをとる立場にありながら共同生活者でもあるため指導者の関わりは、子どもたちのコミュニケーション能力の変動に大きな影響を与えていると考えられる。

そこで、本研究では野外教育活動の中での子どものコミュニケーション能力の変動を追い、特に指導者の関わりに注目する。また本研究においてはコミュニケーション能力をキーコンピテンシーにおける「異質な集団で行動する能力」と定義する。

方 法

1. 期間

- 1)Y市立N小学校：2015年9月10日
- 2)および3)Y自然学校：2015年9月13日

2. 対象

- 1)Y市立N小学校の児童6名(男子：3名 女子：3名)
- 2)Y自然学校1班の児童5名(男子：2名 女子：3名)
- 3)Y自然学校2班の児童6名(男子：2名 女子：4名)

3. 方法

今回観察したすべてのグループに共通していた「野外炊事活動」でビデオ観察を行い、NIH Proficiency Scale(<https://hr.od.nih.gov/workingatnih/competencies/proficiencyscale.htm>)に当てはめ6段階評定で30秒ごとの最大値を計測した。

結 果

調査の結果以下のようなグラフを得た。

図.1 児童のコミュニケーション能力の推移

図1を見るとコミュニケーション能力は「揺れ」を伴って変動していることがわかる。現出している場面では児童自ら他者と関わり、現出していない場面では児童が、他者と関わる様子が見られなかった。これらの関わりはプログラムの中で生じており、やるべき作業が明示されているとき、児童はコミュニケーションをとっている。また、指導者が関わることで変動している。指導者が児童に働きかけることにより、児童の発言が促進されていた。また、児童の発言を、他の児童に拡散することにより、高い水準で変動していた。しかし指導者がある特定の児童とのみ関わりを持ち、児童からの働きかけに対して無反応であったとき児童はコミュニケーションをとらなくなったことが窺える。

考 察

野外炊事を通じた児童のコミュニケーション能力の変動には①プログラム、

②指導者の関わりが必要である。プログラムでは児童が目標を認識できるプログラム設定が必要である。目標がはっきりしていると、児童は集団としてその目標に向かって活動でき、そのなかで“すべきこと”を見つけ、話し合いながら活動することができる。指導者は児童を個人として捉え、コミュニケーション能力を高めるために関与しなければならぬ。これは①理想化した行動②精神的モチベーション③知的触発④個別配慮⑤理想的な特質から成る“トランスフォーメーションリーダーシップ”(Burns, 1978; Bass & Avolio, 1994)の考え方に基づく。トランスフォーメーションリーダーは発達を最適化しよう試みるという(Bolden, Gosling, Marturano & Dennison, 2003)。さらに、文部科学省の教育再生実行会議提言にも見られるように、“一人一人の状況に応じてその力を最大限伸ばす教育”が現在必要とされている。そこで指導者はトランスフォーメーションリーダーシップの考え方に基いた関わり方が必要であるとする。しかし、現在の指導者のリーダーシップはPM機能研究に見られるように児童への関わり方で学級風土をどのように変えていくかという視点に立っている。これは個人の発達ではなく、集団をよりよくしていく、という考え方である。

また、指導者も児童との関わりの中で、自身のコミュニケーション能力をNIHにおける中級者から上級者、専門家のレベルまで変動させていかなければならない。なぜなら上級者は他者をコーチングでき、専門家は複数のプロジェクトに対して能力を応用できるレベルにあるからである。指導者は自身がコミュニケーションをとるだけでなく、児童のコミュニケーションをコーチングし、児童のコミュニケーション能力を応用することによって、プログラムの目的を果たすよう促さなければならない。これはキーコンピテンシーの相互作用性である。指導者自身が発達しながら、児童の発達を促し、児童が発達することにより、指導者も発達していくというサイクルの中に当てはまっている。そのサイクルの中で児童は目標に向かって最適なコミュニケーションをとるようになっていき、自身のコミュニケーション能力を発展させているのである。

以上のことから、本研究では野外炊事において、児童のコミュニケーション能力は他者と関わりあうことによって揺れを伴いながら変動している。また、より関わり合いを増やし、高い水準へとコミュニケーション能力を発達させるために、①目標の分かりやすいプログラム設定②トランスフォーメーションリーダーシップの考えを持った指導者の関わりが必要であることが明らかになった。

引 用

- Bolden, R., Gosling, J., Marturano, A. & Dennison, P. (2003) A Review of Leadership Theory and Competency Frameworks. Report for Chase Consulting and the Management Standards Centre, Centre for Leadership Studies, University of Exeter.
- Burns, J. M. (1978) Leadership. New York: Harper & Row.
- Bass, B. M. & Avolio, B. J. (1994) Improving organizational effectiveness through transformational leadership. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- NIH Proficiency Scale. <https://hr.od.nih.gov/workingatnih/competencies/proficiencyscale.htm>